

# 教えて！先生 日本人形の衣裳に迫る

## 第4回 女房装束②

日本人形の衣裳にとことん迫る本企画。人形の衣裳に使われている文様や生地はもちろん、着せ方についても詳しく解説していきます。業界のスペシャリストを講師に迎え、衣裳の基礎から応用まで教えていただきます。知識の習得や再確認、セールストークにお役立てください！  
第4回は前回に引き続き「女房装束」です。今回は衣服の各パーツについて詳しく調べてみました。

松井幸生さん  
株式会社善助商店社長  
Matsui Yukio

金襴織物・裂地の製造卸商を営む。菅田屋勤兵衛から数えて13代目。京人形商工業協同組合副理事長。平成12年伝統的工芸品産業審議会臨時委員任命。翌年、伝統的工芸品産業の奨励賞を受賞した。

### 今日の先生



### 女性の装束

## 五衣唐衣裳

五衣唐衣裳は「いつつぎぬからぎぬも」と読み、十二単は俗称。

平安時代においては宮中女子の標準服だったが、現在では御即位の大札の儀や御成婚などの宮中の儀式でのみ、皇室・皇族がお召しになる。

十二単が誕生したのは十世紀頃（平安時代中期）と言われている。ただ当時の装束については記録が少ないことから、室町時代末期頃には誕生当初と異なるものになっていたという。

明治維新前の装束「御再興」により平安時代に近い形に戻された。御即位の大札の儀、皇族妃の御成婚に見る十二単の姿はこのスタイルが基となっている。

「いつつぎぬからぎぬも」

— 前回に引き続き、今回のテーマは女房装束です。各衣を詳しく勉強します。資料をもとに今回は「五衣」「打衣」「表着」「唐衣」を調べて、まとめてみました。

松井さん いろいろと勉強されていますね。

— 資料を読んではいますが、今の服装とは全く違うし、別世界の話なのでイメージしづらくて、なかなか頭に入っていないのが正直なところです。なぜそこまで詳しく知識をお持ちなのですか？

松井さん 一番は京都というところに住んでいるからでしょう。織物屋で法衣・装束店に生地を納めていたり、装束の仕立てをしているからだと思います。また友人に職人が多いからです。疑問を聞け

る人が近くにいるからかな……。

### 十二単〈各衣の解説①〉 五衣／打衣／表着／唐衣

— 各衣を解説する前に、十二単を着用する順番を教えてくださいませんか。

松井さん 十二単の着装の順番です。大まかに説明すると次のような順番となります。

- ①小袖を着て帯を締める
- ②襦（靴下）を履く
- ③長袴の腰の帯を、腰の右前脇で片輪結びする
- ④単を着て、その上に五衣↓打衣↓表着の順で重ねていく
- ⑤唐衣を打ちかけて、裳の腰を正面に結び、二本の小腰のあまりを等しく計らう

襦とは足袋とは違い指先が割れていないものです。コハゼ（留め具）ではなく履き口の小紐で足首を括り留めます。

装束を着装する技術を衣紋とい、作法として確立したものを衣紋道といいます。それについても学習すると装束の理解がさらに深まりますので、今後のテーマにすると思いいます。

### ●五衣（いつつぎぬ）

五衣は単と表着の間に着る桂を5枚重ねた総称。もともとは寒さや暑さを調整するためのもの。襟や袖口・裾口に表れる複数の色の重なり「重ねの色」を大切にしました。平安中期には重ねる枚数に決まりはなく身分や季節、儀式によりさまざまだった。その後、奢侈禁止

令（儉約を推奨する）が何度も出  
て、次第に5枚が基本となり五衣  
と呼ばれるようになった。

上皇后美智子様は、表  
が松立涌の紅で5枚とも同じ色、  
裏は「紅の匂」で重なるにつれ濃  
くなる。帛御服（大嘗祭や新嘗祭  
に着用する）は純白の装束で、五  
衣は表裏ともに白の平絹の重ね。

**先生から補足** 「おめり」につい  
て触れておきましょう。袿の裏地  
を表に折り曲げて、襟と衽（えだ）にか  
けて表地をふち括りするように縫っ  
たものがおめりです。表地とおめ  
りの間に一色生地を挟み込むのが



※説明のため櫛層を外した状態で撮影

- ①大垂髪（おすべらかし）
- ②唐衣（からぎぬ）
- ③表着（うわぎ）
- ④打衣（うちぎぬ）
- ⑤五衣（いつつぎぬ）

⑥単と⑦長袴については、第5回で解説します。

撮影協力／株式会社吉徳

中陪で、グラデーションで美しく  
見える装飾的な効果があります。  
男子の装束だと下襲に用いられま  
す。表地の生地のかどの汚れや、  
摩擦から守る役目があります。

●打衣（うちぎぬ）

五衣の上に着る打衣。織物を砧  
で打ち、柔らかさに加えて光沢を  
持たせた。のちに板引の技法が用  
いられて堅いものになった。板引  
とは生地に光沢と張りを持たせる  
技法で、糊を含ませた織物を漆塗  
りの板に張り付けて乾燥させてか  
らはがす。そうすることで堅く艶  
のある生地が完成する。

大正天皇の即位大礼まで装束で  
頻繁に登場した板引だが、関東大  
震災や恐慌の社会情勢を鑑み、簡  
素化が進んだ昭和の大札から廃止  
された。以降、打衣は形も柔らか  
さも五衣と同じとなり、全体を引  
き締めるアクセントとして用いら  
れている。

●表着（うわぎ）

表着は打衣の上に重ねる。下の  
衣よりも華麗な織物で、色目や文  
様など階級により異なり、表に二  
陪織物・浮織物・堅織物といった  
生地を用いた。

上皇后の御表着の表地は白のタ  
テ糸、薄い萌黄色のヨコ糸で三重  
櫛の文様を浮織物として、さらに  
やや濃いめの萌黄色のヨコ糸で白  
樺の丸を上紋とした二陪織物。裏  
地は萌黄色の平絹。文様は上皇后  
の御印である白樺に由来する。

**先生から補足** 令和の即位礼正殿  
の儀で皇后雅子様がお召しになっ  
た表着は三重菱地にハマナスの文  
様で、おめりは藤色、中陪は紫色  
でした。

●唐衣（からぎぬ）

奈良時代の「背子」が変化した  
もので、一番上に着る朝服に不可  
欠な衣。唐という名の通り、中国  
大陸からもたらされた衣服である  
ため唐衣と呼ばれた。

一番上に着る目立つ衣であるた  
め禁色規制の対象であった。勅許  
（天皇の許し）がなければ赤色・  
青色の唐衣は禁止された。赤色は  
深い紅を指し、青色は現代でい  
うブルーではなく黄緑色に当たる  
色。ともに元来、天皇の御服の色  
だったことから禁色となった。

とりわけ特別な意味を持つのが  
白色の唐衣といわれる。皇后第一  
の唐衣は白色ということである。

平成の即位礼正殿の儀で、上皇  
后が着用された唐衣は、表地は小  
葵を浮地紋に紫色の向鶴の丸を上  
紋とした格調高い二陪織物で、紫  
色の小菱紋の固地綾を裏とする菊  
の重ねとなっている。

**先生から補足** 皇后雅子様の唐衣  
は白を基調としており、小葵地鷲  
色向松喰鶴の文様でした。

参考文献

- ・仙石宗久著『十二単のはなし——現代の皇室の装い』（オクタブ、1995年）
- ・八條忠基著『有職装束大全』（榎平凡社、2018年）
- ・八條忠基著『素晴らしい装束の世界』（榎誠文堂新光社、2005年）
- ・鈴木敬三編『有職故実大辞典』（榎吉川弘文館、1996年）

※本連載は隔月連載です。第5回は2022年8月号に掲載します